



西玄関を入ってすぐの共用書斎から東の茶の間を見通す。

## 花壇の立体長屋 宮城県仙台市 2013

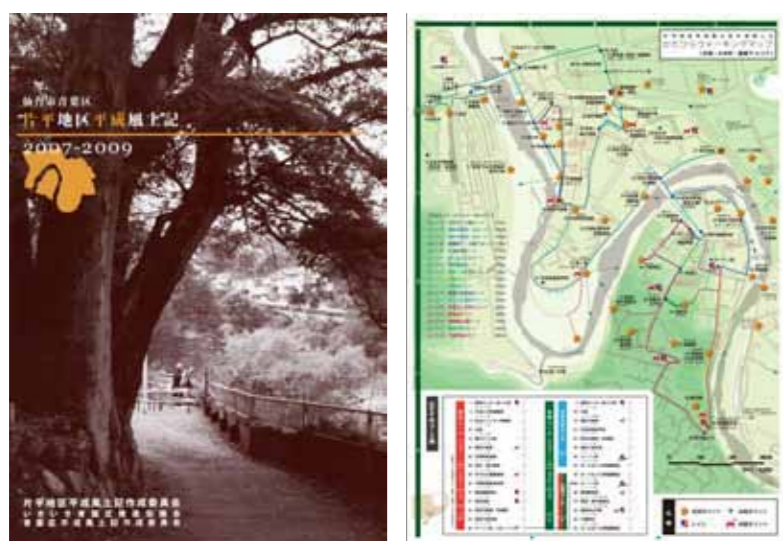
Masahiro ONUMA



広瀬川の風景。



対象住戸のあるマンション。



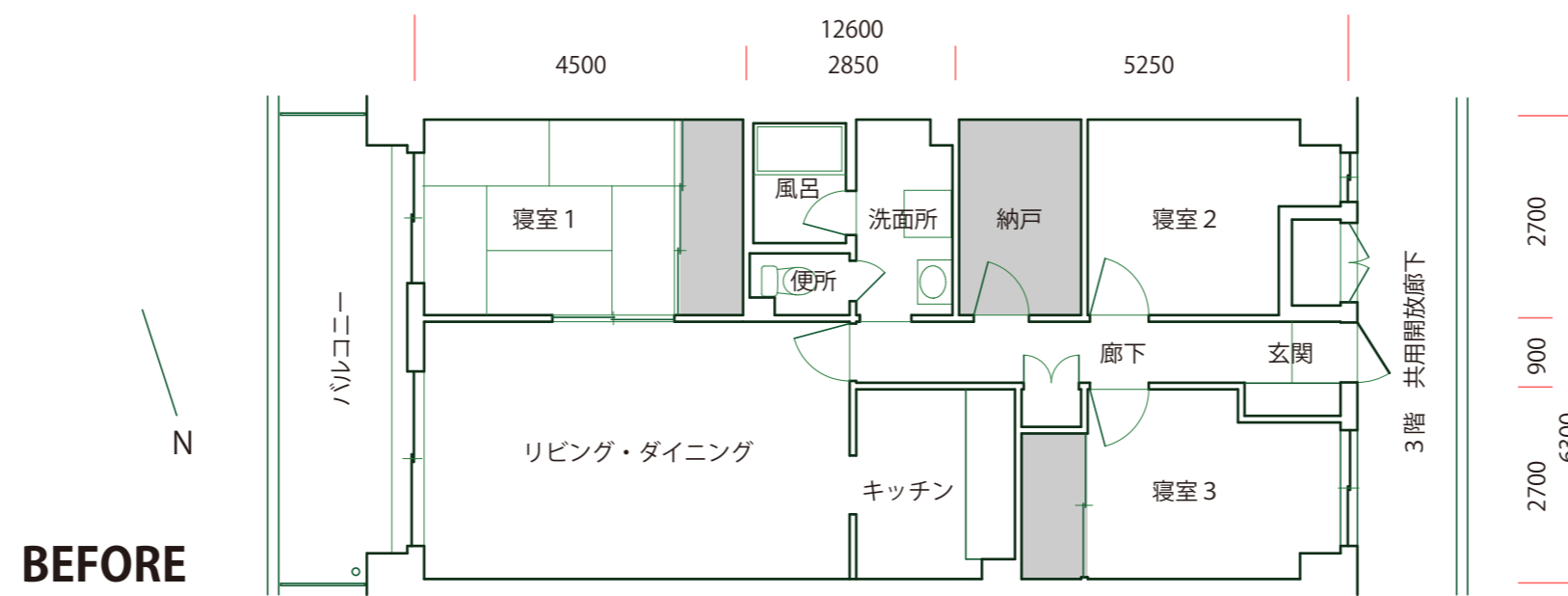
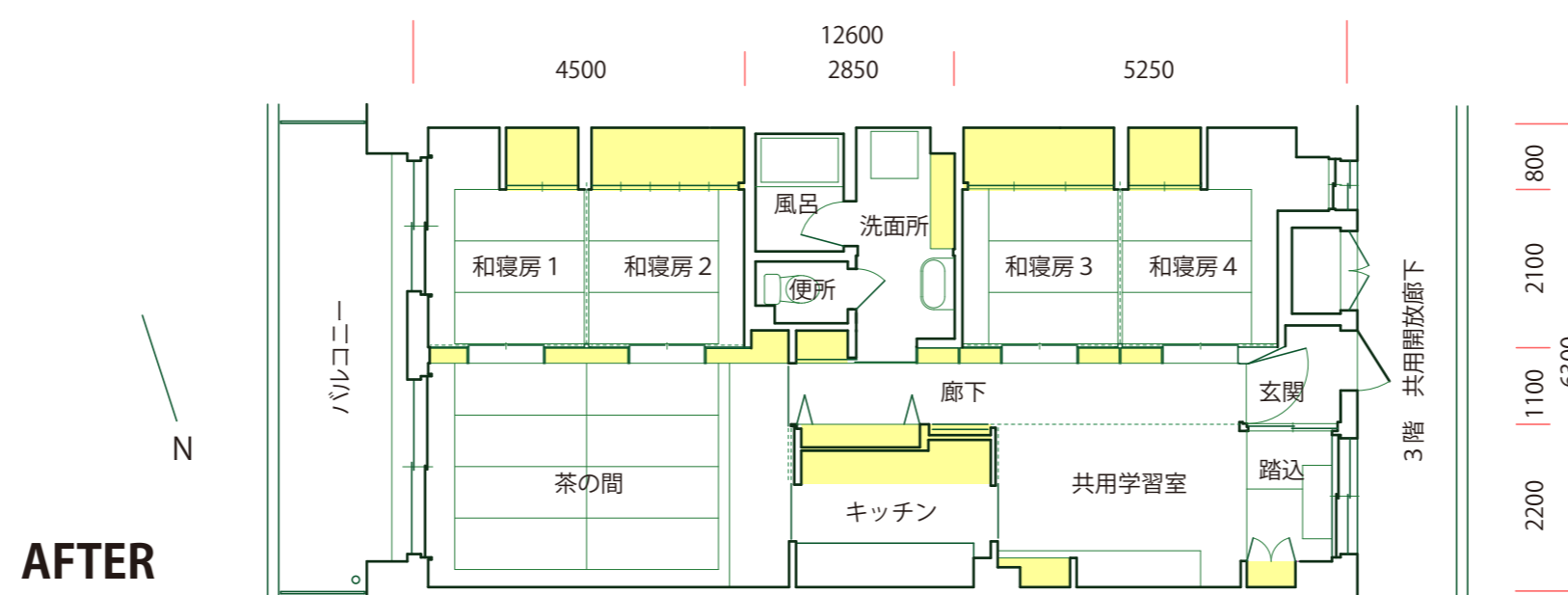
片平地区平成風土記と町歩きマップ。



まちなか農園藤坂。



藤坂織姫神社。



PLACE/MAP

### まちにすむ一郷土建築家をめざして

新耐震基準以前の中古マンションの一室をリフォーム(模様替え)した自邸である。

普段は民家再生などに関わる関係上、抵抗感がなかったといえは嘘になるが、それよりもこの広瀬川沿いの仙台花壇大手町に暮らし続けたかった。

1997年に地区内の建設会社に勤め、その後地区内の古い公団住宅に住み、以来、地区内での居住は5カ所目になる。

子どもの学区変更を避けたことも大きな理由だが、もともと文教地区で、市内でもまちづくりの先進地として注目を集めており、それに長らく参画させていただいていることが大きい。

例えば、都市計画道路未利用地を借用して始まった「まちなか農園藤坂」はその一例だ。

子どもたちの交通安全を脅かす、地下鉄東西線工事の資材置場となる危惧を回避し、コミュニティの再興を図って共同菜園をつくったものである。

地域の祭りはもちろん、農や食を楽しむ各種イベントのほか、都市農村交流を含めた産直市の舞台になったこともある。協同菜園の畑の区割りデザイン、地先石積み、学生ビルドによる収納付板塀などが、ささやかながらアーキテクト的な貢献の成果である。

このほか、学区全体で総勢200名余のメンバーが関わって地域の個性を発掘した「片平地区平成風土記」や、名所をあつめた「片平名所マップ」の編集も担当してきた。

都市住民は、土を直接耕すことはできないが、文化を耕すことはできる。その喜びは、農山漁村には及ばずとも、かけがえがない。

もちろん、ここが終の住処となる可能性は高くはない。だが、日本の都市の住文化や、まして3.11大震災の仮設住宅の居住期間を考えれば、家と宿さえ、線引きは難しい。実際のところ、自分など寝に帰るばかりの毎日である。重要なのはむしろ、主婦や子どもたちが気兼ねなく友人を招くことのできる、長屋のような開放性だろう。

資産も家財も重くない、簡素な仮庵=宿のような住まい。しかし、時とともに味わいを増す造作も欲しい。そのため、空間はプリモダンな自然素材で構成したい。日々のなかで愛着をはぐくみ、仕事や趣味を持ち込むことができ、地域との関わりが感じられる住戸プラン。そのような新たな「型」を探った。